

ケルン商科大学のディプローム試験と外国人留学生

早 島 瑛*

はじめに

森林太郎、北里柴三郎、長岡半太郎、志賀潔などがドイツに留学した1880年代から第一次世界大戦にかけて、ドイツの大学は「世界の大学」としての名声を誇り、とくにベルリン、ミュンヘン、ライプチヒの大学は各国から多数の外国人留学生をあつめた¹⁾。たとえばベルリン大学は1901年夏学期に学生総数5075名、そのうち外国人の留学生は872名に達した。外国人の比率は1割5分であった。同じくベルリン大学の医学部をみれば、1913年夏学期で学生総数1840名、そのうち外国人学生数644名、外国人の構成比は3割5分に達した。ミュンヘン大学の医学部でも1910年の冬学期の学生総数2119名の2割が留学生であった²⁾。

しかし、外国人が留学していたのは、これらフンボルトの理念による大学、換言すればドイツ大学史の時代区分でモーラフのいう古典期の大学（古典大学）だけではなかった。ベルリンもミュンヘンもライプチヒも同時に商科大学をもち、たとえばシュマーレンバッハやニックリッシュが学んだライプチヒ商科大学では1904年から第一次世界大戦が始まる1914年まで全学生の半数以上が外国人であった³⁾。しかも1907年冬学期には学生総数706名のうち留学生が445名を数え、構成比は6割3分に達した。ライプチヒは「アウエルバッハ」(Auerbachs Keller)のテーブルで5人の商科大学生がビールを飲んでいるとき、2人がドイツ人、3人が異邦人であった⁴⁾。

さきに「商科大学の異邦人」でフライベルク鉱山大学やベルリン商科大学に学んだ俄国一や渡邊鉄蔵の例をあげたが、ドイツは古典大学のみならず（これまで看過されていたことであるが）さまざまな単科大学も多数の外国人を集めていた。本稿の目的は、単科大学の事例としてケルン商科大学をとりあげ、ドイツが哲学、歴史学、法学、化学、物理学、医学などの古典的な学問分野だけではなく、高等商業教育の領域においても魅力的な留学先であったこと、しかもヨーロッパ各地から広く留学生を集めていたことを確認することにある。これは他の商科大学はもとより他の単科大学との比較、さらには古典大学との比較をおこなうための前提であり、最終的には国際比較のための準備作業である。18歳人口の減少にともなう大学の危機のさなかにあって、近代史と大学史の研究における外国人留学生の比較研究は今後ますます重要となるであろう。

ケルン商科大学はドイツにおける商科大学設立運動において3番目の商科大学として創設された。ドイツで最初の創設はさきに触れたライプチヒの商科大学である。これは1898年4月商業会議所によって創設され、設立当初は（経済的理由から、また戦略的にも）独自の教授陣と学舎をもち、商科大学の学生は経済学、財政学、法学などの「専門科目」をライプチヒ大学において、簿記、

* 広島大学 高等教育研究開発センター学外研究員／関西学院大学商学部教授

商業計算、商業通信などの「技術科目」をライプチヒ上級商業学校（Höhere Handelslehranstalt）において学んだ。ライプチヒ商科大学はいまでいう「独立法人」の形態に近い。また、ドイツで2番目の創設は同じく1898年の10月にアーヘン工科大学に併設された商科大学であるが、これも独立の大学ではなく、学生少数につき10年後に閉鎖された⁵⁾。

これに対し1901年に市立の形態で創設されたケルン商科大学はドイツで最初の独立した商科大学である。大学の財政はメーヴィッセン基金を基盤としてケルン市参事会が責任をもち、ケルン商業会議所の助成はあったが、プロイセン政府による国庫助成は皆無であった。設立主体はケルン市参事会、運営主体はケルン市長を理事長とする理事会である。理事会は理事長と11名の理事から構成され、11名の内訳はプロイセン政府委員、学長、ケルン市議会代表3名、教授会代表3名、ケルン商業会議所2名、メーヴィッセンの家系を継承するシュタイン家の代表1名であった⁶⁾。

商科大学は1919年にケルン大学（Universität zu Köln）に昇格し、学位審査権を獲得した。商科大学の機能は社会経済学部がこれを継承したが、1924年12月の試験規定の改正までは1913年の試験規定が適用された⁷⁾。したがってディプローム試験と商業教師試験の制度に関するかぎり、ケルン商科大学は実質的に1920年代のなかばまで存続したといえる。このケルン商科大学において、1901年から1919年末まで、合計1163名の学生がディプローム試験と商業教師試験に合格し、ディプローム・カオフマンまたは商業教師として社会に飛び立った。この1163名のうち151名、比率にして1割3分が外国人であった。本稿の考察の対象はこの151名の留学生である。一体、彼らはどこからきたのか。その地理的分布如何⁸⁾。

1 外国人留学生関係文書

外国人留学生の地理的分布に関する史料は何か。それは大学の事務局（Sekretariat）において業務上の必要から作成された広義の学生文書、いわゆる<Studentenakten>である。したがって史料としてはドイツ人学生に関する文書と外国人留学生に関する文書の間に区別はない。本稿でいう外国人留学生文書とはケルン商科大学の事務局にあった学生文書の一部である⁹⁾。

ケルン商科大学に入学を許可された留学生は、ドイツ人と同じく、まず大学の事務局において学籍簿（Personalblatt）の用紙をうけとり、これに必要事項を記入して提出し、さらにマトリケル（Stammbuch）に署名する義務をもった。これら学籍簿やマトリケルなどの学生関係文書ははやくから大学史研究にとって最高の価値をもつ史料として認められてきた¹⁰⁾。ケルン商科大学の例においても、この文書によって学生の出身地のみならず、他のさまざまな個人データが確認できる。具体的には姓名（同時に性別）、生年月日、出生地、国籍、信仰、学歴と職歴、父親の職業、入学時の居住地などである。これにより出生地に関して一般的には出生地の地名と郡（Kreis）や県（Regierungsbezirk）の特定が、とくにドイツ国籍の場合には邦国（Bundesland）の特定が可能となる。ただ学籍簿の国籍の項に「ドイツ人」と記入された事例があり、この場合邦国の特定は困難となる。出生地の国名がかならずしも国籍名と一致しないからである。さらに学籍簿の宗教欄によってカトリックかプロテスタントか、さらにはプロテスタントの場合、ルター派か改革派の特定

Personal-Blatt

des Studierenden Hospitanten - Seminaristen:

Familienname	<i>Leisser</i>
Sämtliche Vornamen <small>(Namen in unvertreten.)</small>	<i>Alfred</i>
Tag des Eintritts	<i>21. April 1902</i>
Geboren am	<i>18. Mai 1881</i>
Geburtsort	<i>Laa an/der Thaya</i>
Kreis	<i>Bezirkshauptmannschaft: Mistelbach, N. Ö.</i>
Staatsangehörigkeit	<i>Österreich</i>
Religion	<i>römisch-katholisch</i>
<hr/>	
Stand oder Beruf des Vaters <small>(Allgemein gehaltene Angaben, wie „Besitzer“ oder „Befehlshaber“ sind zu vermeiden.)</small>	<i>K. K. Polar im Wien VI. Bez.</i>
Gegenwärtiger Wohnsitz des Vaters oder, falls dieser verstorben, der Mutter oder der sonstigen nächsten Angehörigen <small>(Ort und Straße.)</small>	<i>Wien VII./2 Zollergasse 37I</i>
<hr/>	
Schulvorbildung der Studierenden <small>(Nennung der zuletzt besuchten Schule und Angabe der erzielten Stufe. Zeitpunkt des Abgangs von der Schule.)</small>	<i>Kärntner Gymnasialklassen; zuletzt: Kgl. Technische Hochschule in München</i>
Praktische Vorbereitung <small>(Ausdehnung: Ort und Dauer der kaufmännischen Tätigkeit.)</small>	
Einmalige frühere Hochschul-Studien <small>(Nennung der Hochschulen und der an denselben angebrachten Halbjahre.)</small>	<i>Kgl. Technische Hochschule in München 3 Semester</i>

Die Richtigkeit vorstehender Angaben bescheinigt durch Namens-Unterschrift:

Köln, den *21. April* 1902.

Eigenhändige Unterschrift des Studierenden:

Gegenwärtige Wohnung:

Alf. Leisser
Köln Rhein, Eifelstrasse 76

Am genaue Beantwortung obiger Fragen in deutscher Schrift und sofortige Rückgabe dieses Blattes an das Sekretariat wird ersucht.

が可能となる。前頁にケルン商科大学における学籍簿の一例を掲載した。これは本稿で考察の対象とする151名の外国人の一人であるアルフレート・ライサー (Alfred Leisser) の学籍簿である¹¹⁾。

この学籍簿をケルン商科大学における留学生の学生文書の一例として具体的にみれば、まず上部左に「市立ケルン商科大学」とあり、上部右に「1902年夏学期」と入学の学期が記載されている。マトリッケル番号の部分は空白であるが、登録番号は「10番」と記載され、これは本人が1902年夏学期に（ドイツ人を含めて）10番目の学生として登録したことをしめす。次に上部中央に大きめの活字で印字されている〈Personal-Blatt〉の文字がくる。本稿では「学籍簿」と訳した。その下の行に学生の「属性」が3種印字され、ひとつを残して他の2種を削除する様式になっている。ライサーは「正規学生」であるが、他の2種はホスピタントとゼミナリストである¹²⁾。

つぎに学籍簿の本文1行目と2行目に学生の姓名がくるが、以下、入学日、生年月日、出生地、出生地の郡、国籍、宗教と続く。ライサーの場合、入学は1902年4月21日、出生日は1881年5月18日である。したがってケルン商科大学が創設されて2年目の春に20歳で入学したことになる。出生地の地名はラー (Laa an der Thaya) である。ラーは下オーストリア州ミステルバッハ区に属した。ここで区と訳したのは「ライタ以西」のオーストリア・ハンガリー帝国における行政単位 (Bezirkshauptmannschaft) である¹³⁾。国籍欄にはオーストリア人とあるが、これは本人がオーストリア・ハンガリー帝国のなかの「ライタ以西」の出身であることを示す。宗教欄によればライサーはローマ・カトリックであった。

ここまでの本人についての項目であるが、次のブロックのふたつの欄は父親に関するデータである。最初の1行目は父親の「身分」 (Stand) または「職業」 (Beruf)、2行目は父親の「現住所」の欄である。ライサーの父親はヴィーン第6区の政府公認の公証人 (k.k. Notar)、住所はヴィーン市第7区ツォラー街31番であった。一般に学籍簿に父親の名が記入されている例が少なくないが、ライサーは父親の「身分」を示すことで十分と考えのか父親の名はない。

第3のブロックは本人の学歴と職歴に関するものである。最初の1行目が「最終学歴」に相当する。ライサーはギムナジウムに8年間在籍し、ケルン商科大学に入学するまではミュンヘン工科大学に在学していた。アビトゥーアに関する記載がないのでアビトゥーア獲得の事実はないと考えられる。2行目は「実業実習」の欄である。この欄にはとくに職種と実習期間を記載することになっているのであるが、ここも「記載なし」であるからライサーには職歴がなかったことが分かる。次の3行目は、ケルン商科大学に入学する以前に他の高等教育機関に在籍していた場合、その高等教育機関の名称と在籍した学期数を記載する欄である。ライサーの学歴は「ミュンヘン王立工科大学3学期在籍」であった¹⁴⁾。

最後のブロックは申告内容が真実である旨の宣誓の部分である。記入日、本人の署名、本人の現住所と続く。最終行の2行分のゴチの印字の部分は新入学生に対する注意書である。「ドイツ語で正確に記入のうえ、すみやかに商科大学事務局に提出のこと」とある。

ライサーの学籍簿は現在ケルン大学アルヒーフに所蔵されており、アルヒーフの分類では文書第29門 (Zugang 29) である¹⁵⁾。留意すべきは学籍簿に記載された内容は（地名を含め）あくまで入学時の「本人申告」によるものであり、項目によっては、たちいった史料批判が必要となる。

2 試験合格者の特定

では入学後のデータ如何。具体的には、如何なる科目を履修し何を学んだか、とくにどの教授の指導をうけたか、ディプローム試験あるいは商業教師試験に挑戦したか、そのさいの受験科目はなにか、試験は合格か不合格か、など、これら在籍中のデータと試験に関するデータはどのようにして入手できるか。また、最終的に試験合格者を如何に特定するか。

ここでもドイツ人学生と留学生をとわず、在籍中のデータ、さらには試験に関するデータは試験関係文書から得ることができる。いわゆる<Prüfungsakten>である。しかし、この試験関係文書の重要性はこれまで看過されてきた。あるいは無視されてきたといってよい。それは大学史研究がこれまであまりにも強く「入学前データ」にこだわりすぎていたからである。しかし、そもそも大学史研究において卒業統計を作成しようとするとき、試験合格者を（史的に）厳密に特定する作業が不可欠となる。「史的に特定する作業」とは「文書で確認する作業」を意味するのであるから、卒業統計は試験関係文書なくして作成できない。

ところでケルンにかぎらずドイツ商科大学における試験関係文書の中心にあるのが試験委員会の文書である。ケルン商科大学でいえばディプローム試験や商業教師資格試験の執行に責任をもつ試験委員会(Prüfungskommission)の記録である。これは学生文書と同様に現在ケルン大学アルヒーフに所蔵され、分類では文書第4門(Zugang 4)である¹⁶⁾。

まぎらわしいのは、この第4門のなかの文書(試験関係の記録文書)も第29門と同じく<Personal-Blatt>と名称されていることである。本稿では第29門文書のなかのそれを「学籍簿」と訳したが、この第4門文書のなかの<Personal-Blatt>は「試験委員会記録」とする。

いま問題にした試験合格者の特定、すなわちディプローム試験に合格したか否か、あるいは商業教師試験に合格したか否かは、最終的にはこの「試験委員会記録」による。ケルン大学当局は学期ごとに「試験合格者一覧」を『ケルン商科大学人名録』(Personalverzeichnis)のなかで公表してきた。そしてこの「合格者一覧」はながらく試験合格者を特定するための史料として考えられてきた。しかし1998年から1999年にかけてケルン大学アルヒーフにおいてたちいった調査をおこなった結果、この「合格者一覧」には重大な誤りがあることが判明した。大学当局によって作成され公表された「合格者一覧」のなかに不合格のものが含まれ、反対に「合格者一覧」に合格のものが記載されていないことが分かったのである¹⁷⁾。

したがって、この「合格者一覧」は試験合格者を特定するための最終史料にはならない。また、このこととは別に、1917年から1919年まで、すなわち、商科大学がケルン大学に昇格する直前の3年間は「合格者一覧」そのものが公表されなかったため、この期間の試験合格者に関しては第4門文書の分析が不可欠の作業となる。この意味でも1901年から1919年までの試験候補者(Prüfungskandidat)に関し、文書第4門による統一的な合否確定の作業が必要となった。

問題は文書第4門にかなりの「試験委員会記録」が欠落していることである。この場合、当該学生(試験候補者)が試験に合格したか否かに関し、試験委員会の文書で直接的に確認することはできない。この場合は、いまのところ、さきに触れた『ケルン商科大学人名録』のなかの「試験合格

者一覧」の記載に依拠せざるをえないのである。

こうしてケルン大学アルヒーフ所蔵の文書第4門約5000冊のなかから1163名のディプローム試験と商業教師試験の合格者を特定し、さらに、この1163名のなかから、文書第29門のなかの「学籍簿」により外国籍であることが確認できる151人を集成することができたのであるが、この集成作業には次の手順をふんだ¹⁸⁾。まず『ケルン商科大学人名簿』の「試験合格者一覧」から1916年までのリストを作成した。これは比較的単純な作業である。次に、この合格者氏名をケルン大学アルヒーフ文書第4門の「試験委員会記録」と照合した。ここからが本格的なアルヒーフ・アルバイトとなる。まず、地下1階のアルヒーフ倉庫 (Magazin) において、文書第4門のなかから当該学生の文書ファイルを探しだす¹⁹⁾。これは想像される以上にはるかに難事業であった。みつかった文書ファイルは5階の閲覧室にもちあげる。しかし文書ファイルのなかには「試験委員会記録」が欠落しているものがある。ついで「試験委員会記録」により「試験合格者一覧」の記載が正確であるか否か、したがって当該学生が試験に合格したか否かを確認する。

この作業とは別に「試験委員会記録」を基盤に「合格者一覧」にない試験合格者の特定作業をおこなう。つまり「合格者一覧」には記載されていないが「試験委員会記録」では合格となっている事例の確定作業である。また、この作業の過程において同時に1917年以降の試験合格者の特定作業をおこなう。

こうした作業の結果、試験合格者に同姓異名の学生が存在するとき、「合格者一覧」には合格者と非合格者が混同されている例のあることが確認された。また、姓名に関してかなりの誤植があることが判明した。これは結果として別人が合格者として記載されていることを意味する²⁰⁾。

こうして最終的1163名の試験合格者が特定でき、このうちから本稿の研究対象である外国籍の試験合格者合計151名を析出した。そのさいドイツ国籍か外国籍かの判別は「学籍簿」の国籍の欄に本人が記入した内容によった。なお151名全員が男性であった。

この151名を試験種目別にみると、ディプローム試験合格者が149名、商業教師試験の合格者が2名である。少なくともケルン商科大学に関するかぎり、外国人留学生にとって商業教師試験はさほど魅力的な資格試験ではなかったことが分かる。商業教師試験の合格者2名のうち1名はドイツとの国境に近いペーメン東北部の行政区ガブロンツの出身、他の1名はカントン・ベルンの農村からきたスイス人であった。

3 試験合格者の地理的分布

ケルン商科大学における外国人留学生のディプローム試験合格者の構成をみれば、第一次世界大戦が勃発する1914年まで外国人の試験合格者の総数は一定のリズムで増減を繰り返していたことが分かる。1903年から1905年にかけて徐々に減少し、それ以降1909年まで増加を続け、1910年に急減したのち、1911年を例外として1914年まで再び増加を続けた。これに対してドイツ人を含むケルン商科大学の試験合格者は、全体としてみるに、1906年と1912年を例外として第一次世界大戦の勃発まで増加を続けた。したがって、ケルン商科大学においては外国人の動向と試験合格者の全体数の

動きとの間に、他の商科大学、たとえばライプチヒにみられるような関連性を認めることはできない。ライプチヒでは外国人合格者の増加が試験合格者全体の増加に連動していた²¹⁾。しかし、ケルン商科大学において試験合格者のなかで外国人のしめる位置は量的にさほど大きくなく、全体の動きに影響をおよぼすことはなかった。

ケルン商科大学における外国人の試験合格者は量的に小さなものであったが、その出身地は地理的にきわめて広範囲に広がっていた。まずドイツと直接国境を接する国のなかから外国人合格者の出身国をあげれば、東から東南にかけてロシア、オーストリア・ハンガリー、南から西北にかけてスイス、ルクセンブルク、ベルギー、オランダがあり、ついで北欧ではノルウェー、スウェーデン、フィンランド、南欧ではイタリアとスペイン、バルカン半島ではセルビア、ルーマニア、ブルガリアがあった。また中近東ではパレスチナを含むトルコがあり、遠くはアメリカ合衆国とブラジルがあった。合計17ヶ国である²²⁾。

この151名を国籍別にみれば10名以上の合格者をだした国のうち、第1位はオーストリア・ハンガリーの56名（うち1名は商業教師試験合格者）であった。ケルンでは外国人の3割7分がフランツ・ヨーゼフの帝国からきていたのである。第2位はロシアの24名であるが、これにフィンランドの2名を加算すればロシア国籍は合計26名となる。ついで第3位がスウェーデンの13名、第4位がオランダとルクセンブルクの各12名であった。以上5ヶ国で合計は119名、比率にして8割弱である。10名以下の国ではスイス5名、ルーマニア4名、ベルギー、イタリア、ノルウェーの各3名があり、これにセルビア、ブルガリア、トルコ、ブラジル、アメリカ合衆国の各2名が続き、最後にスペインの1名がくる。ベネルックス3国は合計27名を数え、フィンランドを含むロシアの26名より多い。また、このベネルックス3国とオーストリア・ハンガリー、ロシア、スウェーデンの合計は122名（80.8%）であるから、ケルン商科大学でディプローム・カオフマンとなった外国人（うち1名は商業教師試験合格者）のうち、5人に4人はこれらの国の出身であったことが分かる。ケルン商科大学において試験に合格した外国人は北はスウェーデン、東はロシア、東南はオーストリア・ハンガリー、西北はベネルックス3国からの留学生で大半をしめた。ラインラントに位置するケルンは社会的経済的にも、さらには歴史的地理的にも西方志向が強いが²³⁾、商科大学は距離的に近いオランダ、ベルギー、ルクセンブルクのみならず、地理的にはるか遠方の北欧、東欧、南欧、さらにはバルカン諸国から広範囲に留学生を集めていた。これはライプチヒ商科大学と大いに異なる。ライプチヒ商科大学へはロシアとオーストリア・ハンガリー出身の学生が集中豪雨的に到来し、1898年から1921年までにディプローム試験に合格した外国人854名のうち、第1位がロシアの379名（44.4%）、第2位がオーストリア・ハンガリー252名（29.5%）であり、外国出身のディプローム・カオフマンの7割4分がこの2ヶ国に集中していた²⁴⁾。

ケルン商科大学における外国人の試験合格者151名の出生地をみると、遠方の地名としてオランダの植民地セレベスのマカサル（ウジュンパンダン）、同じくオランダの植民地スマトラのパレムバンをあげることができる。ここからきた二人の留学生の父親は前者が公証人、後者は船舶の船長であった。この東南アジアの植民地を別とすれば、ケルンから最も遠方の出生地は南米ではブラジルのバヒア（サルヴァドール）、北米ではニューヨークであった。また中近東ではイスラエルがあり、ヨー

ロッパ大陸では東方はヤルタ、オデッサ、モスクワ、西はスペインのビスカヤがあった。このうちバヒア生まれの留学生(Francisco S. de Ugalde)の父親の職業は学籍簿で見ると商人(Kaufmann)、現住所はキューバ北岸の都市、学歴欄によれば英国の商業学校の卒業生であった。一般に商人とは小店主をさすことが多いが、ここではむしろ国際的に活躍した貿易商を意味すると想定できる。またイスラエル出身の留学生(Rabeno Azriel)はユダヤ教のラビの息子であった。

4 出生地と信仰

ケルンは周知のようにカトリックの大司教座を擁し、アルプス以北のヨーロッパ諸国におけるカトリシズムの拠点のひとつであり、商科大学に集まる外国人はカトリック教徒の子弟が多数派をしめたと想定できる。事実、たとえばルクセンブルクの12名のうち、学籍簿に記入のない1名は別としてすべてカトリックであった。しかし外国人151名がカトリック一色に塗りつぶされていた訳ではない。なるほど最大の集団はカトリック(40.4%)ではあったが絶対多数ではなく、第2位の集団であるプロテスタント(37.7%)はカトリックの数にやや近い。さらに正教徒が6名(4.0%)、ユダヤ教徒が21名(13.9%)であった。外国人のなかのユダヤ人の構成比1割4分はかなりの高率といえる。

ここで国籍別に外国人の信仰をまとめると次のようになる²⁵⁾。

	Oe	R	S	NL	L	CH	Bu	Ru	B	I	N	Br	Se	T	US	Sp	合計	構成比
旧教徒	35	2		1	11	2	2		2	3			1		1	1	61	40.4
新教徒	16	11	13	8		3					3	2			1		57	37.7
正教徒								2					1				6	4.0
ユダヤ教	5	13					3	1						2			21	13.9
その他				3	1			1	1								6	4.0
合 計	56	26	13	12	12	5	5	4	3	3	3	2	2	2	2	1	151	

「その他」の6名のうち教会離脱者が1名、学籍簿の宗教の欄に記入しなかった外国人が5名であった。

この表によりケルン商科大学における外国人のディプローム試験合格者の構成を国別にみると次の特徴が析出できる。ただ、学籍簿に記入された出生地のなかには、その地名を歴史地図のうえで確認することが困難なものがあり、最終的には現地での調査が必要となる。

- (イ) 最大の集団であるオーストリア・ハンガリーからきた56名の合格者の内訳はカトリック35名(62.5%)、プロテスタント16名(28.6%)、ユダヤ教徒5名(8.9%)であった。プロテスタントの構成比は同国のプロテスタントの総人口にしめる構成比(1割弱)の3倍、かなりの高率である。ユダヤ人の構成比も同国のユダヤ人の総人口にしめる構成比(4.5%)の2倍であるから、これも高率である。二重帝国を地域別にみれば、最大の集団はブタペスト1名、プレスブルク(ブラチ

スラヴァ) 1名, カッシュォウ (コシツエ) 1名, デブレツィン1名, クローンシュタット (ブラショヴ) 2名, シェスブルク (シギショアラ) 4名を含むハンガリーの20名 (35.7%), 次がベーメン (Böhmische Länder) からきた18名(32.1%)である。この2国あわせて38名, 構成比は7割弱。フランツ・ヨーゼフの帝国からきた留学生のなかでプロテスタントの比率が高いのはハンガリーからの留学生にしめるプロテスタントの構成比が高いことによる。オーストリア・ハンガリーのプロテスタント16名のうち12名がハンガリー出身, そのうちクローンシュタット2名, シェスブルク4名であった。前者2名は大企業の経営者と女子上級学校の教師, 後者4名は年金生活者, 織物工場の経営者, 織物職人, 市役所出納係の家庭の出身であった。彼らは「ザクセン人」(Siebenbürger Sachse) とよばれていたトランシルヴァニア地方のドイツ系住民の子弟であると想定され, 経済的に中層から上層に属したと考えられる。6名すべてルター派のプロテスタントであった。

ハンガリーとベーメン以外の残りの3割強の留学生のなかには, ケルンから地理的にはるか遠方のブコヴィナはチェルノヴィッツ, シュタイアマルクはドラヴァ河以南のツイリ, ボスニアは首都のサラエヴォ, さらに帝国最南端のパナートの首都テメシュヴァール (ティミショアラ) やダルマチア地方からきた学生が含まれる。しかし, 反対にドイツに直接国境を接するクローンラント *Vorarlberg, Tirol, Salzburg, Ober-Österreich* からの試験合格者は皆無であった²⁶⁾。

- (ロ) ロシア国籍26名の内訳はユダヤ教徒13名, プロテスタント11名, カトリック2名であり, ロシアからきた留学生の半数がユダヤ人であった。彼ら13名の出身地は首都モスクワ1名, バルト海沿岸地方のリガ, コヴノ (カウナス), ヴィルナ各1名, 黒海沿岸のヤルタ1名, およびワルシャワ5名を含む旧ポーランド王国出身6名を含む。13名の父親のうち1名はすでに死亡していたが, 残りの12名の父親は大土地所有者 (Gutsbesitzer) 1名を例外としてすべて商人か工場主であった。社会的にも経済的にも上層に属する。ロシア国籍のプロテスタント11名のなかにはリガ出身が3名, ザンクト・ペテルスブルクが2名, オデッサ1名がいた。ロシアからきた留学生について注目すべきは, その半数がユダヤ人であったこと, そのまた半数近くがポーランド出身であったことである。
- (リ) 西北の隣国オランダからきた12名の内訳はプロテスタント8名, カトリック1名, その他3名 (うち不明2名) であり, ベルギーとルクセンブルク出身がほとんどカトリックであったのに対し, オランダは (推定通り) プロテスタントが多数をしめた。オランダは11州からなるが, さきに触れた植民地生まれの2名を除く10名のうち5名はドレンテ, オーバーアイセル, ヘルダーラントなどドイツに直接国境を接する3州の出身であり, 3名がロッテルダムやワルヘレン島のフィリシングンなどの北海に面する海港都市の生まれであった。残りの2名のうち一人はドルトレヒト, 他の一人はフランスのボルドー出身である。
- (ル) ルクセンブルク出身の12名を如何に理解するか。大学史研究, とくに学生史研究においてルクセンブルはきわめてユニークな性格をもつが, それは同国に大学が存在しないからであり, 学生の多くはフランスの大学に留学していた。では高等商業教育に関してはどうか。面積2600平方キロ, 1900年前後で人口わずか24万の国がケルンにおいて12名のディプローム・カオフマンを輩出

している。(ライプチヒ商科大学ではルクセンブルクからきたディプローム・カオフマンは2名、商業教師も2名であった。)ケルン商科大学のルクセンブルク12名は絶対数ではごく少数であるが、同国と比較してはるかに大国である人口510万のオランダの12名や同じく人口670万のベルギーの3名に対比して注目すべき数値である。人口670万のベルギーの3名はいかにも少ないが、ここはアントウエルペン商科大学の影響を想定するのが妥当であろう。

- (村) スウェーデン、ノルウエー、フィンランドの北欧3ヶ国の合計17名は(想定されるように)全員がプロテスタントであった。スウェーデンの13名のうち3名はストックホルム、ウプサラ、エーテボリの生まれである。一人はゴトランド島のビスビュからきた。さらに外国生まれが3名いた。リガ1名とザンクト・ペテルスブルク2名である。ザンクト・ペテルスブルクに生まれた一人がノーベル一族のグスタフ・ノーベルである。1886年10月17日生まれ、父は石油化学工業社長エマヌエル・ノーベルであった。1906年冬学期にケルン商科大学に入学し、1909年11月16日、23歳でディプローム試験に合格している。またノルウエーの3名のうち2名は半島南部の西海岸の海港ベルゲンとスタヴァンゲルから、フィンランド2名のうち一人はフィンランド湾に面したビボルクからきた。ケルンを選択した北欧の17名の留学生との関連で北欧に地理的に比較的近いベルリン商科大学の統計を確認する必要があるが、これは後の課題としたい。
- (ク) ケルン商科大学においてディプローム試験に合格した正教徒の留学生は全体で6名にすぎない。そのうちブルガリアが3名、ルーマニア2名、セルビア1名である。バルカン諸国を国別で見ればブルガリアは全体で5名、うち2名がカトリックであった。正教徒の一人は黒海のコスタブルク、カトリックの一人はスターラ山脈のなかの小都市トローヤンの生まれであった。ルーマニアは全体で4名であるが、4人とも社会出自と信仰は確認できる。一人は首都ブカレストの正教徒の工場経営者の息子、次はルーマニア東部のボトシャニのユダヤ人の商人の息子、3人目はシレト河流域の小都市ロマンの商人の息子、最後の一人は正教徒の農場主の息子であった。セルビア出身の2名の父親をみれば、一人はベオグラードの正教徒の商人、他の一人はギリシャ・カトリックの大土地所有者(Gutsbesitzer)であり、同時に穀物商を営んでいた。経済的に上層に属するといえる。
- (ト) 最後にアメリカ合衆国の国籍をもつ二人の留学生に触れておけば、一人はニューヨーク生まれのカトリック、父親は年金生活者、他の一人はケルン近郊のオイスキルヒェンの生まれ、父親はプロテスタントの商人であった。

おわりに

ケルン商科大学でディプローム試験と商業教師試験に合格した外国人留学生は、学生文書から判断するかぎり、地理的分布においても信仰構成においてもさまざまな集団から構成されていた。ケルン商科大学における外国人留学生集団の特徴を明らかにするためには、ライプチヒやミュンヘンなど他のドイツの商科大学との比較が必要になるが、ここでは若干のケルンの様相と考えられる点をまとめておきたい。

第一は外国人合格者の構成比の「相対的な高さ」である。ライプチヒ商科大学における外国人合格者の構成比4割5分と比較してケルンの数値1割3分は一見して低いように見える。しかし、ドイツにおける商科大学の創世期の数値としてみれば、むしろかなり高率であるというべきである²⁷⁾。とくに第一次世界大戦が勃発する直前の数年間の外国人の構成比をみれば1割5分から2割近くに増加を続けており、この数値の変化は注目に値する。

次にケルンにおける商業教師試験の合格者2名(0.8%)の意味である。ライプチヒでも商業教師試験合格者の総数385名に対し、外国人はわずか9名(2.4%)であったが、ケルンではほとんどゼロに近い。一般に外国人にとってドイツの商科大学における商業教師の試験はさほど魅力的な資格試験ではなかった。では一体、ケルンで商業教師の資格を獲得した二人の外国人の動機は何か。ここでは試験に合格したときの年齢が手がかりになるように思える。スイス人は37歳、ベーメンからきた留学生は32歳であった。前者はカントン・ベルンの教員養成所の出身、小学校の教師をへてケルン商科大学に入学した。後者は父親の工場の経営を引継ぎ、ケルンにくる前の職歴はみずから「工場主」(Fabrikant)であった。ケルンにきたとき、すでに35歳になっていた。二人ともドイツの商科大学を「生涯教育」の教育機関として理解し、現実にその意味で活用していたと想定できる。

第三は外国人留学生の出身地の地理的な広がりである。ドイツをかこむロシア、オーストリア・ハンガリー、スイス、ルクセンブルク、ベルギー、オランダからの留学生の合計は114名、構成比は7割6分であり、かなりの集中度である。しかし、出生地の地理的な広がりからみれば、ケルン商科大学の地名度が国際的にきわめて高かったことが分かる。東はオランダの植民地のセレベスとスマトラ、西は新大陸のニューヨークと南米はブラジルのバイア、ヨーロッパ大陸では東方にヤルタ、オデッサ、モスクワ、ザンクト・ペテルスブルク、西方にスペインのビスカヤ、バルカン半島ではサロニキ、ブカレスト、ヴァルナ、ベオグラード、サラエヴォ、さらには遠く中近東のイエルサレムがあった。ここで欠けている国のなかで、(ライプチヒ商科大学との対比で)とくに注目されるのは地理的に比較的近い英国(ライプチヒ商科大学4名以下同)、フランス(3名)、デンマーク(1名)、遠くはギリシャ(5名)とポルトガル(1名)である。とくに英仏2国の欠落の理由を如何に理解するかが問題となる。世紀転換期における英独仏をめぐり国際経済的な要因から説明できるか、あるいは英仏の高等商業教育の発展から説明できるか。これは今後の課題である。

カトリックの大司教座都市に創設されたケルン商科大学のディプローム試験は、カトリックのみならずプロテスタントやユダヤ人、さらには遠くバルカン半島の正教徒にとっても魅力的な資格試験であった。これがケルンの第四の特徴である。たとえばオーストリア・ハンガリー帝国の少なからず数のプロテスタントの人びと、とくにトランシルヴァニア地方のいくつかの都市の富裕なプロテスタントの人びとは1500キロのかなたのカトリックの大司教座都市に子弟を送ってきた。ルーマニア、セルビア、ブルガリアの正教徒も、ハンガリーのユダヤ人も、ドイツの商科大学を選択するにあたり、ライプチヒでもミュンヘンでもなく、はるか遠方の、しかもカトリックの都市を選んだ。ではライプチヒでもミュンヘンでもなく、資格試験獲得の高等教育機関としてケルンを選択した理由はなにか。それはケルン商科大学がもっていた社会的な評価の高さによると考えられる。

この第四の点に関連して最後に仮説として提示さるべきは大学のもつ社会的評価に関する情報伝

達の問題である。ケルン商科大学で試験に合格した外国人のリストをみれば、複数の合格者を輩出した都市がいくつか確認できる。そのうち、リガ、クローンシュタット、シェスブルクからきた学生はすべてプロテスタントであり、ワルシャワからきた5名の学生はすべてユダヤ人であった。留学するにあたり、それぞれの内部でドイツの商科大学について情報交換の機会をもったと考えられ、したがって比較的狭い地域社会の内部におけるケルン商科大学に関する情報の流れは縁故関係も含めて個人的な関係に左右されたと想定できる。

シュマーレンバッハを擁したケルン商科大学の評価の高さはこれまで経営学の領域で学問史の問題として言及されてきた。しかし、ケルン商科大学に対する高い評価は当時から（すでに）外国人留学生のあいだできわめて広範囲に広がっていた。大学の評価を問題にするとき、外国人の量的存在と出身地の地理的分布の広がりは無視できないように思われる²⁸⁾。

【注】

- 1) 本稿は『大学論集』第29集（1998年度版）の拙稿「商科大学の異邦人」に対応するものである。前回はライプチヒ商科大学を中心に論じたが本稿の対象は表題のようにケルン商科大学の外国人留学生である。ドイツに留学した日本人については次を参照されたい。Michael Rauck, *Japanese in the German Language and Cultural Area, 1865-1914. A General Survey*, Tokyo Metropolitan University 1994. なお、注の表記はドイツ語文献方式で統一した。また本稿で触れる出生地は原則として学籍簿に本人が記入したドイツ語の地名である。本稿では現地の言語の地名を併記すべきであるが原則としてこれをはぶいた。
- 2) *Datenhandbuch zur deutschen Bildungsgeschichte*, Bd.I, Teil 2 : *Wachstum und Differenzierung der deutschen Universitäten 1830-1945*, von Hartmut Titze, Göttingen 1995, S.86-87, 461.
- 3) ドイツの商科大学における外国人留学生については次を参照されたい。前掲「商科大学の異邦人」。拙稿「商科大学学生構成分析 ライプチヒ 1898-1920」『商学論究』第47巻第1号、関西学院大学、1999年。拙稿「バーメンからきたディプローム・カオフマン」『言語と文化』関西学院大学、2000年。
- 4) 前掲「商科大学の異邦人」231-233頁および前掲「商科大学学生構成分析」153-181頁。Akira Hayashima, Heinrich Nicklisch und seine Leipziger Kommilitonen, in : *Heinrich Nicklisch und Japan*, hg. von Erich Loitlsberger, Shoichi Ohashi u. Michael Thöndl., Böhu Verlag Wien (im Druck).
- 5) Hans Münstermann, Die Handels-Hochschule Aachen. Ein Versuch zur Verwirklichung der Wirtschafts-Hochschul-Idee, in : *Technik, Wirtschaft, Kultur. Carl-Max Maedje zum 70. Geburtstag*, hg. von Peter Mennicken u. Fritz Ottel, Düsseldorf 1954, S.45-57.
- 6) ケルン商科大学の史的概観は次をみよ。*Kölner Universitätsgeschichte*, hg. von Erich Meuthen, Bd.2 : *Das 19. und 20. Jahrhundert*, verfaßt von Bernd Heimbüchel u. Klaus Pabst, Wien 1988; Akira Hayashima, *Der Kölner Weg zum Promotionsrecht, Kwansai Gakuin University Annual*

Studies, Bd.31, 1982.

- 7) 拙稿「ケルン商科大学ディプローム試験規定考」『商学論究』第46巻第4号、関西学院大学、1999年。
- 8) 本稿の基本史料はベルリン・ダーレム国立文書館、デュッセルドルフ国立文書館、コブレンツ州立文書館、ケルン市文書館、ケルン商工会議所文書館などの文書およびケルン大学アルヒーフ所蔵の学生文書と試験文書である。本文で触れた1163名のディプローム・カッフマンと商業教師の一覧は次の拙稿にある。Akira Hayashima, *Die erste Generation der Kölner Diplom-Kauffrauen und Diplom-Handelslehrerinnen*, *Kwansei Gakuin University Social Sciences Review*, Bd.3, 1998 u. ders., *Die erste Generation der Kölner Diplom-Kaufleute und Diplom-Handelslehrer*, *Kwansei Gakuin University Social Sciences Review*, Bd.4, 1999.
- 9) ケルン大学アルヒーフの文書については次をみよ。Gerda Schütz, *Universitätsarchiv Köln, Mitteilung der Universität zu Köln*, Jg.1998, Köln 1998.
- 10) とはいえドイツにおいても近代大学についていえばマトリッケル研究はさほど進んでいない。
- 11) *Universitätsarchiv Köln, Zug.29, Personalblatt Alfred Leisser*.
- 12) ホスピタントとは特定の科目のみ履修する目的で入学した学生（聴講生）をさす。ゼミナリストとは「ゼミナール出身生」のことであるが、ここでゼミナールとは教員養成所（*Lehrerseminar*）を意味し、初級学校の教師の資格をもち商業教師の資格試験を目標として入学した学生をさす。このように（創設直後のケルン商科大学においては）商業教師試験を目標とする学生は正規学生として扱われず「ゼミナリスト」として別扱いであった。単に学内の事務局における扱いではなく対外的にも統計的にも別扱いであり両者は創設当初は明確に区別されていた。
- 13) ここでは「区」と訳したが、これはドイツの県（*Regierungsbezirk*）よりは小さく、ほぼ＜*Kreis*＞に相当した。ミステルバッハはオーストリア・ハンガリー帝国を構成するクローンラント（*Kronland*）でいえば「下オーストリア」の東北部に位置し、北はメーレン、東はマルヒ（モラヴァ）河をはさんでハンガリー王国に接していた。学籍簿のなかの＜*N.Ö*＞とはこの下オーストリアの略語である。Adam Wandruszka u. Peter Urbanitsch (Hg.), *Die Habsburgermonarchie 1848-1918, Bd.2: Verwaltung und Rechtswesen*, Wien 1975.
- 14) 王立工科大学とは「バイエルン王国政府の設立認可をうけた工科大学」の意味である。
- 15) ケルン大学アルヒーフは1961年にシーダー学長（*Rektorat Theodor Schieder*）のときに開設され、大学本部、大学事務局、ケルン市長室などから順次、関係文書が搬入された。文書は出所主義の原則（*Provenienzprinzip*）により分類され、分類番号は搬入順、つまり受け入れ順につけられた。ライサーの学籍を含む学生文書は第29門（*Zugang 29*）である。前注9「シュッツ論文」参照。
- 16) ケルン大学アルヒーフ文書第4門の出所（*Provenienz*）は「ケルン商科大学試験委員会」であるが、本文でも触れるように第4門の文書にはいくつかの欠落がある。この欠落が搬入以前からのものか、それ以後のものかは不明であるが大学本部に欠落部分が残存している可能性は小さくない。

- 17) この「試験合格者一覧」はケルン商科大学が公式に公表した「卒業生リスト」であるから、たとえ「ディプローム証書」が最終的に決定的な意味をもつとはいえ、誤った内容の発表は重大な結果をもったと考えられる。しかしケルン大学アルヒーフで商科大学関係文書を見るかぎり、大学当局が如何なる処理をとったかは確認できなかった。
- 18) ただし、これは結果としてこうなっただけであって、実際の作業には試行錯誤が少なくなく、手順の前後関係が逆になることがあった。
- 19) ただし国立文書館や市立文書館と同じくケルン大学アルヒーフでも閲覧者は「マガツィン」に立ち入ることはできない。あくまで例外措置であった。
- 20) 前注17参照。
- 21) ライプチヒ商科大学における外国人のディプローム・カッフマンは1898年から1921年まで合計843名であった。このうちハプスブルク帝国籍は252名であるが、その内訳はライプチヒ商科大学の学生文書から集計したものである。前掲「商科大学の異邦人」233頁表3参照（一部修正）。
- 22) フランスとイギリスが皆無であること、ドイツに直接隣接する国のなかでデンマークからの留学生がゼロであることは注目に値する。
- 23) ケルンの近代史は次を参照されたい。Eberhard Gothein, *Verfassungs-und Wirtschaftsgeschichte der Stadt Köln vom Untergange der Reichsfreiheit bis zur Errichtung des Deutschen Reiches. Die Stadt Köln im ersten Jahrhundert unter Preußischer Herrschaft 1815-1915*, Bd.1, Teil 1, Köln 1916; Carl Dietmar u. Werner Jung, *Kleine illustrierte Geschichte der Stadt Köln*, 8. Aufl., Köln 1996.
- 24) 前注21参照。
- 25) この「国籍別信仰別一覧」の省略記号は次の通り。Oe オーストリア・ハンガリー, R ロシア, S スウェーデン, NL オランダ, L ルクセンブルク, CH スイス, Bu ブルガリア, Ru ルーマニア, B ベルギー, I イタリア, N ノルウェー, Br ブラジル, Se セルビア, T トルコ, US アメリカ合衆国, Sp スペイン。
- 26) いまのところこの理由は解明できないが、すべて南ドイツに直接国境を接している地帯であることからドイツに留学した場合、ケルンではなくミュンヘンを選択したと推定できる。
- 27) むしろドイツの商科大学のなかでライプチヒが異常に高かったというべきである。ライプチヒほどではないがベルリン商科大学における外国人の構成比もかなり高かった。
- 28) ドイツの商科大学は一年志願兵や初級学校教師など大学教育から排除されていた集団に門戸を開放し（前掲「商科大学の異邦人」）、さらには女子学生の入学を積極的に推進（拙稿「ディプローム・カッフマンとなった女性たち」『大学論集』第25集参照）することにより新しい学生市場の開拓に成功した。外国人留学生の問題もこの観点から把握する必要がある。

*本稿は平成11年度および平成12年度の文部省科学研究費補助金基盤研究（C）による研究果の一部である。

Die ausländischen Diplom-Kaufleute an der Handelshochschule Köln

Akira HAYASHIMA *

An der städtischen Handelshochschule Köln, die 1901 als die erste selbständige Handelshochschule in Deutschland gegründet wurde, legten bis 1919 insgesamt 1163 Studierende eine kaufmännische Diplomprüfung oder/und eine Handelslehrerprüfung erfolgreich ab. Von den 1163 Studierenden stammten 151, d.h. 12.98% aus dem Ausland. Darunter befand sich jedoch keine Frau. Von den 151 wurden 149 Diplom-Kaufleute und nur zwei Diplom-Handelslehrer.

In der vorliegenden Studie wird die geographische Herkunft der 151 Ausländer aufgrund der Akten des Sekretariats und der Prüfungskommission der Handelshochschule untersucht, die heute im Universitätsarchiv Köln zugänglich sind. Sie stammten aus 17 Ländern, wobei Österreich-Ungarn und das zaristische Rußland sich als die größten Gruppen darstellten. Aus der Doppelmonarchie kamen 56 Studierende und aus dem russischen Reich einschließlich Polen und Finnland 26. Die dritte Gruppe kam aus Schweden mit 13 und die vierte aus den Niederlanden sowie aus Luxemburg mit je 12. Die Schweiz und Bulgarien standen mit je 5 an der sechsten Stelle. Die Studierenden aus diesen sieben Ländern machten 80 Prozent von allen Ausländern aus. Die weiteren zehn Länder waren Belgien, Italien und Norwegen mit je drei Studenten, Brasilien, Serbien, die Türkei und die USA mit je zwei, und schließlich Spanien mit einem. Es läßt sich feststellen, wie hoch die Handelshochschule Köln von Jugendlichen vor allem in den nord-, nordöst-, öst- und südöstlichen Ländern Europas geschätzt wurde. Sie kamen in der Tat aus den von der rheinischen Metropole weit entfernt liegenden Städten z.B. Bergen, Uppsala, Stockholm, Visby und Göteborg im Norden, Dorpat, Wyborg, Riga, Wilna, Kowno, Perna, St.Petersburg und Moskau im Nordosten, Odessa, Cherson, Jalta, Warschau, Czernowitz und Kaschau im Osten, und Saloniki, Skopje, Varna, Pleven, Trojan, Bukarest, Botosani, Roman, Budapest, Kronstadt, Schäßburg, Temeschburg, Szeged, Szekszárd, Debrecen, Belgrad, Sarajevo und Sagreb im Südwesten. Einer stammte aus Bahia, Brasilien. Jedoch findet man unter den 151 Studierenden keinen aus England und Frankreich.

Es ist nennenswert, daß aus der niederländischen Kolonie in Südostasien zwei Studierende niederländischer Staatsangehörigkeit stammten, die sich im gleichen Semester an der Kölner Hochschule einschreiben ließen und zum gleichen Prüfungstermin Diplom-Kaufmann wurden : Herman Gelpke und Cornelis Collot d'Escury. Der erstere wurde am 11. Oktober 1889 als Sohn

* Professor der Sozialgeschichte an der Handelswissenschaftlichen Fakultät der Kwansai-Gakuin-Universität zu Nishinomiya.

eines Notars in Makassar, Celebes, geboren, besuchte eine höhere Bürgerschule in Arnheim und wurde im Oktober 1907 in Köln mit 18 Jahren immatrikuliert. Als er am 26. Juli 1909 eine kaufmännische Diplomprüfung mit Erfolg ablegte, war er noch nicht zwanzig Jahre alt. Der zweite wurde am 22. Oktober 1888 als Sohn eines Kapitäns in Palembang, Sumatra, geboren, besuchte bis Juni 1906 die Handelsschule in Amsterdam und machte in der Amsterdamschen Bank zwölf Monate lang seine Lehre. Im Oktober 1907 ließ er sich dann in Köln einschreiben, studierte vier Semester Volkswirtschaftslehre bei Christian Eckert, Rechtslehre bei Heinrich Geffcken, Chemische Technologie bei Hans Reitter, Französisch bei Etienne Lorck und Handelstechnik bei Hans Hanisch u.a. Er unterzog sich am 22. Juli 1909 mit 20 Jahren erfolgreich einer Diplomprüfung.

Verglichen mit der 1898 von der Handelskammer gegründeten, aber nicht völlig selbständigen Handelshochschule Leipzig, an der bis 1921/22 insgesamt 2036 Studierende eine kaufmännische Diplom-, Handelslehrer- oder/und Bücherrevisorenprüfung mit Erfolg ablegten und davon 854 (41.9%) Ausländer waren, scheint auf den ersten Blick die Kölner Quote mit 12.98 Prozent bedeutungslos zu sein. Der Schein trügt aber. Denn an einer anderen Handelshochschule läßt sich der Anteil der Ausländer etwa so hoch registrieren wie in Köln. Es handelt sich dabei um die 1910 im Königreich Bayern gegründete Handelshochschule München, an der sich bis 1922 insgesamt 614 Studierende einer kaufmännischen Diplomprüfung erfolgreich unterzogen, von denen 455 Deutsche, 64 Ausländer und einer staatenlos waren. (Die Staatsangehörigkeit der restlichen 94 Studierenden läßt sich nicht ermitteln.) Unter den ermittelten 520 Studierenden beträgt der Anteil der Ausländer 12.31 Prozent, was der Kölner Quote durchaus entspricht. Der Leipziger Fall sollte daher für eine Ausnahme gehalten werden.

Die Handelshochschule Köln, die im Zentrum des rheinischen Katholizismus gegründet wurde, hatte auch eine große Anziehungskraft für relativ viele Ausländer jüdischen oder orthodoxen Glaubens. Von den 151 Ausländern waren 21 Juden (13.9%) und sechs Angehörige der Ostkirchen. Von den 21 Juden stammten 13 aus Rußland und davon wiederum 5 aus Warschau. Einer der 21 Juden war ein in Jerusalem geborener Rabbinersohn mit türkischer Staatsangehörigkeit.

In der Religionsstatistik war die katholische Konfession die größte Gruppe mit 61 Studierenden, d.h. 37.7 Prozent von allen Ausländern. Die ausländischen Studierenden katholischer Konfession hätten eigentlich die Wahl gehabt, wenn auch nicht unbedingt zur preußischen Hochschule in der Hauptstadt des Deutschen Reiches oder zur lutherisch-protestantischen Handelsstadt im Königreich Sachsen, so doch zur katholisch-bayerischen Metropole zu gehen. Es ist allerdings noch eine Hypothese, daß bei ihrer Wahl für die Handelshochschule Köln das akademische Ansehen, das sie mit einem Eugen Schmalenbach

genoß, eine entscheidende Rolle spielte. Ebenso ist anzunehmen, daß dabei der konfessionelle Faktor für diese 61 Studierenden weniger von Relevanz war. Auch ist noch zu untersuchen, ob und wie weit der pekuniäre Faktor für die 151 Studierenden aus diesen 17 Ländern bei ihrer Entscheidung für Köln eine Rolle gespielt hat.

